

里山の問題（その2）

大串龍一

河北潟湖沼研究所

〒920-0051 石川県金沢市二口町八58

要約：里山というと，原生の自然が人間の生活・産業活動によって変化しながら，一応の安定を維持している，二次的な自然環境であるといわれる．しかし人間活動と自然の動植物群集の相互作用によって安定している生態系をすべて「里山」というと問題が広がりすぎる．ここでは現在，常識的にイメージされている「里山」の範囲を規定して，その歴史的な変遷，現在の里山生物群集を構成する種の由来とその多様性の原因，さらに「里山」と並んで東アジア温帯の重要な二次生態系と考えられる「水辺」生態系（「里海」を含めて）について論じた．

キーワード：「里山」，生物多様性，縄文遺跡，里山の安定性，「里海」

8. 里山の範囲

「里山」の定義については，まだ完全なものはないと言っても良い。「里山」そのものの理解が人によって異なるから，それも当然かも知れない．しかし，原生の自然のなかで人間集団が長い年月にわたって生活することによってもとの自然が改変され，人間・自然共生系とでも言えるものが成立して，ひとつの安定状態に達している生態系であるという点では一致している．現在の「里山」という言葉で表される「自然 - 人間系」を高く評価する見方は，日本では室田（1985）など早くからあったが，当時は「雑木林」などと言われていた．

しかし人間がその中で生活することによって改変され，ある程度の安定状態に達している生態系をすべて里山といっても良いのだろうか．世界的に見れば，現在の地球上ではごく一部の高山や極地などを除いて，人間が生活していない地域はほとんどない．私が見たモンゴルのゴビ砂漠の中でも，いくらかの草が生えている限りラクダやヒツジなどの放牧家畜群が住み着いていて，いろいろな野生動植物とともに安定した生態系を作っている．この安定が崩れるのは異常気象（過度の乾燥や低温など）や地変（大地震や大洪水など）によって生物相が大きく変わったとき，あるいは家

畜群が増えすぎて草原の草の再生産量を上回った過放牧の状態となった時である．アマゾンやボルネオ（カリマンタン）の森林も多くは里山だという説（田中，2003）もある．私（大串，2004）もインドネシアのスマトラ中部の山村が里山的な環境であるという記録をしたことがある．

日本列島ではほとんどの地域が動植物が生存する上で適当な降水量と気温に恵まれている．したがって近世以降に成立した大都市を除いては，すべての地域に成立しているのは，人間生活と自然環境の働き合いによって成立した生態系であるといってもよいだろう．実は大都市の内部でも人間生活に適応して生きている野生動植物は少なくない．これらをすべて里山あるいは里山的であると言ってよいだろうか．

とくに中世から近世にかけて進行した初期工業の原材料供給地となった山野と，その近くに立地した工業生産の現場を里山といえるかどうかは問題である．日本においては特に製塩に適した海岸と製塩作業者の集落，その近くの燃料となる薪の供給場所である松林を主とした森林で成立している「塩浜」，鑪場（たたらば）といわれていた山中の製鉄場を中心とした集落と原料となる砂鉄鉱山，燃料となる木炭の供給地の広い山林を含めた「金山」（あるいは「鉄山」）は日本の生態系において重要な位置を占めている．1997年に大ヒット作品となったアニメ映画「もののけ姫」で描か

れている室町時代の製鉄場は、付属している筈の多数の炭焼き場がハッキリとは見られないことを除いてはそのイメージをよく伝えている。有岡(2004)の「里山」にはこれらの塩浜も鉄山もすべて人間の改変した山林として「里山」に含めている。鉄以外の金属鉱山、金・銀・銅や鉛、亜鉛などの鉱山も規模は大きくないが同様な条件を持っている。石炭や陶磁器(瓦や煉瓦を含めて)を生産している炭鉱や「窯場」も同様である。現在では採算がとれないために放棄されてその痕跡も次第に消滅しつつあるが、二〇世紀中頃まで日本の各地には小規模な各種の鉱山が散在していた。これらはその周辺には人間活動の影響を受けた地形や植生を残す特色ある生態系が成立しており、かなり長期間にわたって安定していたと考えられる。現在でもその一部の痕跡は見られる。

しかしこのような人間活動と原生自然のはたらきが共同して作り上げた生態系をすべて「里山」といえば、里山に関する論議が拡散してとめどがなくなる。ここでは常識的にある程度の枠をはめて、「里山」という言葉を大切にこの問題を論じることとしたい。中世から現在にかけての日本の自然環境に大きな影響を与えた「塩浜」や「金山」はそれぞれの特性に注目して別に考える。「塩山」や「金山」などを里山から除外する重要な点は、これらは生産者と消費者が分離した広域流通経済の一部となっていることである。「里山」の成立するひとつの要素としては、あまり広くないまとまった地域の内部において生活資材の大半(すべてではない)を自給自足していること、つまり生産と消費が釣り合って完結していることである。いまのところ「里山」と呼ばれているものは日本をはじめ湿潤アジアの山がかつた地域に成立した人間・自然共存のひとつの形と考えるのが適当ではなかろうか。

9. 日本の里山は時代とともに変わってきた

日本の里山イメージの原型は前回にも言ったように谷津田とそれを取りまく丘陵にある落葉広葉樹林および松林を一体とした風景である。それは樹林だけではなく、必ず人間によって維持管理さ

れている草地(茅場)を伴っていた。ふつう、丘陵は下部を樹林として、上部(山頂もしくは稜線まで)を草地としている。これは材木や日頃使う燃料である枝葉などの重いものあるいは頻繁に利用するものは運搬に便利な低い場所に、乾燥したら軽くなりまとめて取り込むことが出来る刈草(主に肥料や餌料とされる)は運搬に手間がかかる所に置かれたためであろう。

大串(1953)は大学の卒業論文のテーマとしたセミ群集の生態研究のために、四国徳島県の勝浦川流域にある中津峯山(海拔775.3m)北斜面の植生の垂直分布を調べて、昭和20年代の里山の状態を記録した。それによると麓から山頂にかけて、水田・畑地(果樹園)・集落 - 松林・雑木林 - 杉林・照葉樹林 - 灌木・草原という配置が明らかになっている。この地域はほとんど炭焼きが行われていなかったため近代の典型的な里山ではない。しかし集落・耕地に接して松林・雑木林が、その上部に広い草地・灌木地帯がある。これがかつては村の生活・生産資材(燃料と肥料など)の供給地であった、人里に近い山のあり方を示していると考えられる。この雑木林と草地の間にある杉林と大きな照葉樹林はここにある古い寺の社寺林として残されているもので、信仰生活も含めた当時の山村のあり方を示している。木炭や石炭(練炭)が普及するまえは、村落に近い山の広い部分が薪としてよく利用された松林に覆われていたことは全国的に知られている。

こうした典型的な里地・里山によって代表される「里山」が、現在われわれがイメージしている「村」の風景であろう。現在では日本の自然の生物多様性が「里山」によって維持されているとよくいわれるが、これは「塩浜」や「鉄山」を含めた広い意味での里山ではなく、大正・昭和初期に一般に「農用林」といわれた雑木林を中心として、谷津田と茅場をセットとした生態系である。よく「里地・里山」といわれるが、この場合の「里地」とされているのは常識的には農林業の集落とその周辺であって、「たたら場」や製塩場その従事者の集落あるいは漁村などは含まれていない。

10. 「里山」とくに日本の里山の特徴

中世から後の日本の里山が必ず草原を伴ったのは、施肥しない耕地では長期にわたって村人の生活を支える収穫が維持できないからであった。その耕地とくに水田の生産性を低く抑えていたのは肥料であった。それは日本では規模が大きな牧畜が成立しなかったことと関係している。18世紀からヨーロッパで発達した農学論 - テアー, チウネン, リービヒなどによって大成された西欧の農学論 - とは違ったアジア多雨温帯・熱帯の農業体系がここにある。

記録が多く残っている江戸時代から明治にかけて良く知られているように、近代まで日本の水田の肥料の重要な部分を占めているのは、緑肥、とくに里山の上部にある草地(茅場)から刈り取ってきた草木であった。田植えの前にこれを多量に水田に入れる作業、いわゆる刈り敷きは当時の農業労働の重要な部分を占めていた。

人口密度が低く収量も多くないごく初期の谷津田の時期を過ぎると、水田に肥料を投入することが稲作の場合にはどうしても必要なものとなっていた。乾燥地帯のヨーロッパで発達した輪作体系、農耕地・休耕地・牧草地を一年あるいは数年ごとに繰り返す三圃式農業は日本の里山では成立しなかった。アジア多雨地帯で自然の地力復元に依存する輪作が成立したのは、隠岐の牧畑(傾斜地の灌木・草原に牛などの大型家畜を放牧して牧場・畑・休耕地として利用する営農体系、アジア内陸の丘陵地帯でも見られる)などを別とすれば焼き畑の場合であろう。これはアジアモンスーン地域では雨による土壌成分の流出が激しいこととともに、稲という植物の多産性に原因があるのではないかと考えられる。肥料を与えればそれに反応して収穫を大きくして、より多くの人口を支えることが出来るイネの多産性が、その土地の供給する栄養分だけではなく他の場所からの肥料の投入を必要として、生態系を変化させてきた。江戸時代の多くの農山村の慣行記録が示しているように、近くの山地・丘陵地の草原から多量の刈草が水田に供給されていた。同様に重要な肥料であったかまどの灰や野焼きの灰などの供給源もこの里

山と茅場である。堆肥、とくに日本では主体となっている湿式堆肥を水田全部に施肥することは、その重量から考えても人力と一部の家畜の力による農業労働力を遙かに越えてしまうだろう。私はある時期までは、堆肥といえればかなり多量の水分を含んだ重い湿式堆肥のことと思っていた。東南アジアの農村で乾式堆肥を見たとき、これが肥料とは思えなかった。おそらく化学肥料が導入されたときも、農家の反応は同じようなものではなかったろうか。

二十世紀になって化学工業で生産される化学肥料が里山生態系の物質・エネルギー・サイクルを解体する前に、徐々に増える人口と、各地で成立してきた都市に食糧と燃料を供給する需要が増していた日本の里山は、都市へ供給する生活燃料の採取とこの水田への刈り敷きによって収奪されて荒廃しかけていた。中・近世の小氷河期の低温がそれに拍車をかけ、繰り返して歴史に残る中・近世の何回かの大飢饉が農山村においては非情な人口調節の役割をした。前の章でも述べたように石炭による燃料革命と、魚肥や大豆粕などの海や平地農村の発展によって供給されるようになった肥料が里山を救った。現在、よくイメージされているのどかで豊かな里山に囲まれたよき日本農村のイメージは、この近代(多分、明治後期から昭和前期まで)一時的に回復している時代の様相を示しているように思われる。

大型(ウシ・ウマなど)中型(ヒツジ・ヤギなど)などの家畜の放牧がほとんどなかったことが日本の農業の特徴である。人間が食物として利用できない種類の植物を主とした植生に覆われた乾燥地帯では、光合成によって生産された植物を人間の食物に転化させる大切な手段が狩猟と牧畜である。これによって成立した遊牧文化はユーラシア古代文明の基礎になって、乾燥したアジア大陸の内陸部に広がっていった。その生活様式は気候的に樹林が成立しない草原地帯ばかりでなく、本来は森林地帯である半乾燥地帯まで広がって景観を変えていった。長江上流部の雲南高原はその接触地帯である。

雲南高原の中にある湖、琵琶湖の約半分の水面面積を持つ雲南のエルハイ(ジ海)の南岸と北岸

の景観の違いは、この文化の違いが植生に及ぼした影響を典型的に示している。それは遊牧を生業としたイ族と稲作農業を生業としたペー族の生活が如何に環境を変えたかを示すものである。イ族の領域である低い針葉樹が僅かに点在する浅緑色の草原に覆われた北岸と、ペー族の領域である濃い緑の樹林に覆われて里山景観を維持している南岸はこのことを実感させる。

11. 日本の里山は安定した生態系であったか？

里山は人間生活と自然の力が釣り合って安定した生態系だとよく言われる。しかし割り切って言えば中世から後、日本の里山は生態的に安定した状態が百年以上続いた時期はなかったと言えるだろう。大河川下流部の広い沼沢地帯の干拓が効果を挙げて増大する人口を吸収した戦国時代後期から安土桃山時代を経て、社会的に安定期に入って増大する人口のはけ口が無くなった江戸時代の日本の各地の低山帯は荒廃が進行して、禿げ山が各地でひろがっていたことは、多くの資料に残っている。村々から見える範囲の雑木林は、ごく一部の社寺林などを除いてはすべて燃料の供給源である赤松林になっており、それも過度の利用によって土壌の流失と裸地化が進んでいた。本多静六の「赤松亡国論」はこの時期の里山の実態から考えられ提言されたものである。

その後、家庭の燃料としての石炭（練炭）や木炭の普及や、化学肥料の増加によって里山の森林はかなり回復したが、その上部の草地（茅場）は毎年の草刈りが行われなくなって灌木の叢林が発達し、それまでの里山の利用価値は減退していた。

さらに第二次大戦中は戦時中の松根油採取のための伐採や樹液採取とそのための樹勢低下によるキクイムシ類の多発、さらに1970年代以降の全国的なマツノザイセンチュウの侵入と大気汚染を主因とする松枯れによって、里山の松は目立って減少した。ナラ、カシ類の広葉樹林が多くまた草地を伴わない現在の里山は、この肥料革命の結果としての草の肥料としての利用がなくなったうえ

に、利用価値が低下した広範な松林の枯死による結果として出来上がったものである。

こうして日本の里山は歴史的に見ると絶えず変化を続けており、長期にわたって安定した時期はなかったのではないかと考えられる。多分、今後も社会環境の変化に伴って変化を続けることだろうと推測出来る。

里山の保全ということがしばしば唱えられている。しかし里山そのものがこれまでに述べてきたように時代と共に変化してきたことを考えると、どのような「里山」を造り維持するのか、そのためにはどのような方針、技術が必要となるのか、さらに踏み込んだ検討が大切ではないだろうか。変化することが「自然」である日本の里山について、どのような状態を維持することが良いか、あるいはどのような変化に任せるのが良いかまだ結論は出ていない。

12. 里山の動植物の特性、里山のミカンシクワシャーを手がかりとして

里山の自然を考えるためのひとつの例として、1960年代から私が調べてきた果樹とその病害虫の生態研究の中から、琉球の特産であるミカンの一種、シクワシャーの事例を挙げてみよう。

日本各地で栽培されているいろいろな果樹、リンゴ、ミカン、モモ、ナシ、ブドウ、カキなどのなかでも、近代になって欧米から導入されたリンゴなどを別として、東アジアの多雨地帯で野生植物から栽培植物化されたもののうち、大産業となったのはミカンなどの柑橘類である。ミカン類でも日本国内で野生状態から栽培状態まで各段階が見られるのは、本土暖地帯のタチバナと琉球諸島のシクワシャーである。

シクワシャーは学名を *Citrus depressa* Hayata といい、沖縄本島を中心に、奄美群島から台湾の山地にまで分布する柑橘類の一種である。現地では栽培、半栽培、野生の各種の状態で見いだされる。私は柑橘類の病害虫の分布と生態を調べるために、1974年から1980年にかけて沖永良部島、沖縄本島、久米島、宮古島、石垣島、西表島の調査を行った。さらに2003年にその後

の状態を知るために沖縄本島と久米島を視察した。

日本の本土では、日本古来の柑橘であるタチバナを含めて、野生の柑橘は果樹園から自然植生の中に逸出したいわゆるエスケープ個体を除いてはごく一部の地域だけにしか見られない。この点、野生、半栽培、栽培の各形態が近年までかなり広く見られた沖縄のシイクワシャーは、その起源が真の野生種であったかは不明であるが（DNA解析からタチバナと華南由来のマンダリンの雑種とも考えられる）、現在でもほぼ野生状態の樹が森林中に見られており、比較生態学的に便利な材料である。

西表島、沖縄本島、久米島、沖永良部島での観察によれば、シイクワシャーの樹は多くは農家の庭園や果樹園の隅に2、3本ずつ生えており、また社寺林、村落付近の雑木林の下層樹として散在していた。野生もしくは半野生の場合、石灰岩地帯（珊瑚礁由来のものを含め）に見いだされることが多い。庭園の場合を除いてはこれらの樹は慣行的に村人の共有のものとして、村の子ども達の間食などとして採取されていた。この種はもともと食用だけでなく、果汁が家庭の洗剤や織物の染色などにも使われていたが、その場合も庭園の樹以外は所有者が決まっていなかったようである。

1980年以降、都市型の生活が沖縄の村にも浸透してゆき、スーパーマーケットの普及とともに、子どもの「おやつ」としてシイクワシャーを食べることはなくなり、洗剤や染色にも使われなくなって樹は放置されて次第に消滅していったらしい。2003年の調査では野生の樹は全く見つからなかった。これは那覇市の市場での聞き取りなどからも知ることができた。

2003年の現地視察と聞き取りでは、最近シイクワシャーの樹は里山の雑木林や社寺林内ではほとんど見あたらず、家の庭の植え込みにいくらか見られるだけで、その果実も食用とはされていない。農家でもこれを食べることを知らないものが大半であった。しかし近年、シイクワシャーのジュースが琉球特産の果実ジュースとして沖縄だけでなく本土でも知られてきたこと、これが発ガン抑制物質を多く含むという知見もあって

ジュース工場も造られ沖縄本島の一部（大宜味、名護など）では栽培されているが、面積は全体を合わせても100ヘクタール前後で果樹としてはごく少ない。

温帯から熱帯にかけて分布する多くの果樹類は、大木となるドリアンや椰子などを除くと大半は灌木あるいはそれに近い樹高のあまり高くない樹で、野生状態では樹冠が閉鎖して林内部が暗くなる原生林内にはほとんど生育していない。野生または半野生の果樹は、特殊な地形（高山や風当たりの強い尾根など）、地質（火山の溶岩地、石灰岩地帯など）で樹高の高い極相の樹林が成立しない場所に生えている。日本本土でもクロマメノキ、コケモモ（高山・風衝地）、タチバナ、ユズ、ウメ、モモ（石灰岩地帯）などがその例である（武内、2006）。

宮崎県のタチバナ原生地は松と落葉樹の優占する植生で、常に下刈りをしている樹林内で維持されてきた。しかし自生のタチバナが天然記念物として保護するために人手を入れないことになったので、下刈りをしなくなった樹林では、樹冠を形成する樹が大きくなって林内が暗くなるとタチバナは減少して絶滅に瀕していると言われる（武内、2006）。これでも判るように栽培されている多くの果樹は、その地の本来の優占樹林が何かの原因で成立を妨げられている場所で生育している。この果樹の例を一般化して考えれば、里山の生物相の多様性は、原生の生物相が成立できないために、野生の自然では特殊な条件（林縁部、倒木などによって出来たギャップ、局地的な地質、気候など）の場所に僅かに生存していた種がここでは良く生育できるためではないかと思われる。

13. 生物多様性と里山

近年、里山の生物が非常に多様性に富んでいるということについて論じられることが多くなった。生物多様性の保全には里山の保全が第一であるという論調がよく見られる。しかし前節の例からも判るように、これは里山が原生林あるいは原生の自然全体よりも生物多様性に富んでいるということではない。

里山の生物を見ると、里山独特の種と言うものは見られない。前項でも述べたように、現在里山の特徵種になっているのは、原生の自然環境では局限された場所、あるいは環境条件のもとに見いだされる種であるが、競争種がないばあいにはより広範な条件のところに生育できる性質をもった動植物である。

繰り返して言うならば現在、里山の生物多様性を代表している植物は、果樹の野生種の生態からも判るように、自然状態でそれらの種が強い風の当たる尾根や石灰岩地帯に生えていたのは、そのような地形や地質に適応して進化したのではなく、より自然条件が良い場所はその地域の優占種（気候極相種）に抑えられていて生育できないために、優占種が生育できないか勢力が弱い場所で生存していたと考えられる。人間がこの優占種を取り除くかあるいは抑制してやれば、こうした競争に弱い種も地形や地力が好適な所で生育できる。これが里山の種多様性の大きな要因であろう。生活の大きな部分を植物に依存している動物についても同様である。従って人間が干渉しないで自然条件で放置すれば、競争力の勝るその地域の気候（大気候）に適した優占種（気候極相種）が時と共にこれらの種を圧倒し、駆逐することが推測される。宮崎県におけるイチバナの保全処置が、その地方の気候に適した優占種の復元を助けて、却ってイチバナを減らす結果となったこともそれを証明していると思われる。

14. 「里山」文化の保全あるいは再生について

今では日本の社会にすっかり定着してしまった「里山」という言葉は、人間生活と自然の作用が働き合って出来上がったひとつの生態系であると理解されている。しかしそれは人間-自然の相互作用系一般をさすのではなく、それが成立した地域と時代によってある程度限定されている。つまり小さな盆地や浅い谷間の水田と集落を拠点として、その背後に雑木林と草地に覆われた丘陵地を一体とした景観で表される地域である。近代日本ではこのような地域が国土のかなりの部分を占め

ている。それはたんなる景観としてではなく、自然環境と人間生活を支えるシステムとして機能してきたと言われている。このシステムの中での人間社会生活を「里山文化」とも言う場合がある。里山の保全とか再生などと言われるとき、それはたんに景観の保全あるいは復元ではなく、そのなかで継承されている文化（当然ではあるがその中で生きている自然観も）の保全をも含まなくてはならないということは、当然のこととして理解されてきている。

割り切ってしまうならば「里山」は地球の変遷や生物の進化のレベルの問題ではなく、現代の人間の歴史の問題である。それは比較的近代に日本（あるいは東アジアの一部）の自然・社会条件のもとで成立した。その条件は今も変化しつつある。現在の里山のイメージになっている明治後期から昭和前期の里山をそのまま復元することは無理であろう。新しく多様な里山像が求められている。

かつて日本列島に成立し現在のわれわれの生活様式に影響を残しているものとして「照葉樹林文化」「ブナ帯文化」がしばしば論じられてきた。今の「里山文化」論は成立年代がより新しいこともあって、まだ十分な整理と検討が進んでいないと思われる。いま必要なのは、日本で発想されさまざまな論議が行われている「里山」問題を、人間生活と自然環境の相互作用系として無限に一般化することではなく、これを世界の環境史の中に適切に位置付け、そのうえでこれが地球環境の保全にとってどのような役割を持つかを考えることであろう。

付記 もう一つの課題、「水辺」生態系 里海などについて

これまでに記述してきた日本の「里山」は、時代と共に少しずつ形を変えながら、ほぼひとつのまとまった景観を作ってきた。ここにひとつの問題がある。

1970年代以降、日本の各地における縄文遺跡の発見とともにひとつの大きな疑問が生まれてきた。それは三内丸山縄文都市遺跡を始めこれら多

くの縄文遺跡が東北日本に多く、西南日本に少ないのは何故かということである。東北日本に縄文時代の文化が展開していた時期に、より温暖で生物生産力が大きい西南日本には、それに適応していた人間生活が存在しなかったとは考えにくい。それを示す遺跡があまり見いだされていなかったことも含めて、どのような人間生活が西南日本に展開していたか、また、それが近世から現代の「里山」文化とどう関係しているかを、さらに検討する必要がある。ここで考えられるのが、従来の常識にある「里山」とは違った、低地の水辺で成立していた「水辺」の生活文化である。

近年、里山とならんで「里海」という言葉が使われることがある。この内容はまだ充分には整理されていないが、ここでいう「水辺」の人間生活は「里海」で言われている内容の一部をも含んだ、従来の「里山」とは異質の歴史的な成立過程を持った、人間と自然との協同して造り上げた生態系であろう。

海や琵琶湖など大きな湖、大河の岸辺、広い沼沢地などの産物を利用する場合には、舟を始めとする各種の道具なしには人間生活は成り立たない。しかしそれらを造り利用する技術を持ったものにとっては、温暖で生物生産力が高い西南日本は、東北日本とはまた別の豊かな生活の場となったであろう。これらの水辺遺跡は時間とともに堆積する泥土に深く埋もれ、台風や津波などの災害を受けて破壊されることが多く、また海や湖の水位の変動、川の流路の変化などで水中に沈むことが多いために、里山の遺跡と較べると消滅しやすく発見が困難ではあるが、若狭三方湖の鳥浜貝塚などいろいろな場所で見いだされている。すでに縄文時代から水鳥、魚類、貝類や水生植物などの生物生産の豊かな潮間帯や浅瀬ばかりでなく、ある程度の沖合まで人間の狩猟・採集活動が行われていたことは、遺跡から見いだされる海獣、海洋魚などの遺体からも推定される。内山(2007)のいう縄文「低湿地生業圏」は東北日本に展開していた生活文化とほぼ併行した、縄文早期からの非常に長い歴史を持っており、現在の「里地・里山」あるいは「里海」と深い関連性があると考えられる。

これまでの「里山」生態系においても、河川を遡上するサケ類の重要性については、しばしば指摘されてきた。それに対してここで重要なのは汽水や大きな淡水域から漁獲されるボラ・コイ類である。北極地方のようにほとんど水産物だけを利用する生活が古代の日本にも存在したとは考えにくい。食糧や生活資材のかなりの部分を海洋、汽水、淡水域に依存する生活文化が、西南日本に広く展開していたということも考えられる。その具体的な内容については、今後の環境歴史学の発展に期待したい。

近頃では強調されることが多い「里地・里山」だけを日本の伝統的な景観として、そこに成立している生活文化だけを尊重する環境保全の方向を、沿海、大河川、湖沼や広い沼沢地帯を含めたより広い視野から見直すことが望ましい。東アジア沿海地域の環境の永続的な保全のためには、従来の里山文化のそれぞれの地域における見直しと保全活用とともに、このような水域を総合してより広く日本列島のここ1万2000年以上の、言い換えれば最終氷期から現在までの、人間と自然環境との共存の歴史を解明してゆかねばならないと考えられる。

文 献

- (里山に関する文献は急速に増えているが、この論考の関係が深いものに限った)
- 有岡利幸．2004．里山 I．法政大学出版会．
- 有岡利幸．2004．里山 II．法政大学出版会．
- 千葉徳爾．1973．はげ山の文化．学生社．
- 千葉徳爾．1975．狩猟伝承．法政大学出版会．
- 広木詔三(編)．2002．里山の生態学．その成り立ちと保全のあり方．名古屋大学出版会．
- 本多静六．1912．改正日本森林植物帯論(本多造林学前論ノ三)．三浦書店．
- 本多静六．2006．本多静六自伝体験八十五年．実業之日本社．(本多静六体験八十五年．1952．を改題・再編集したもの)
- 石井実・植田邦彦・重松敏則．1993．里山の自然を守る．築地書館．
- 市川健夫・山本正三・斉藤功(編)．1984．日本

- のブナ帯文化．朝倉書店．
- 加茂儀一．1973．家畜文化史．法政大学出版局．
- 松井健・武内和彦・田村俊和．1990．丘陵地の自然環境． - その特性と保全 - ．古今書院．
- 宮崎駿（アニメージュ編集部編）．2000．もののけ姫．1 - 5．徳間書店．
- 守山弘．1988．自然を守るとはどういうことか．農山漁村文化協会．
- 守山弘．1997．水田を守るとはどういうことか．生物相の視点から．農山漁村文化協会．
- 村尾行一．1983．人間・森林系の経済学．人間にとって自然とは何か．都市文化社．
- 室田武．1985．雑木林の経済学．樹心社．
- Koji Nakamura et al. ．2006．Satoyama biodiversity and conservation in the Pan-Japan Sea region . p.510-546 . in K. Hayakawa (ed.) Past, Present and Future Environment of Pan-Japan Sea Region . Maruzen Co .
- 中島陽一郎．1996．飢餓日本史．雄山閣出版．
- 社団法人日本林業技術協会（編）．2000．里山を考える 101 のヒント．東京書籍．
- 社団法人日本果樹種苗協会（編）．2000．特産の果物．シイクワシャー．日本果樹種苗協会．
- 大串龍一．1953．中津峰山の生態学的観察．採集と飼育．15(12):375-378．
- 大串龍一．1988．北陸の川と小さな鉾山．福井陸水生物研究会誌．7:1-3．
- 大串龍一．2004．Kupu-kupu の楽園．熱帯の里山とチョウの多様性．海遊舎．
- 大串龍一．2007．里山の問題（その1）．河北潟総合研究．10:33-38．
- 佐々木高明．1971．稲作以前．日本放送出版協会．
- 佐藤洋一郎．1999．森と田んぼの危機．植物遺伝学の立場から．朝日新聞社．
- 四出井綱英．2006．森林はモリやハヤシではない．私の森林論．ナカニシヤ出版．
- 滋賀県琵琶湖研究所（編）．2001．増補改訂版．世界の湖．人文書院．
- 信州大学教養部環境科学講座．1982．自然との共存．新・環境科学論．共立出版．
- 田端英雄．1997．エコロジーガイド．里山の自然．保育社．
- 武内和彦．2006．ランドスケープエコロジー．朝倉書店．
- 玉村豊男．2008．里山ビジネス．集英社．
- 田中淳夫．2003．里山再生．洋泉社．
- H.von Thunen .1842 .Der isolierte Staat .(参照したのは1974 .近藤康男著作集 第1巻 .チウネン孤立国の研究 .農山漁村文化協会)
- 宇田川武俊（編）．2000．農山漁村と生物多様性．家の光協会．
- 梅原猛・他．1985．ブナ帯文化．思索社．
- 内山純蔵．2007．縄文の動物考古学．西日本の低湿地遺跡からみえてきた生活像．昭和堂．